

課題窓

下弦の月

人物

青沼喜代美 (29)

青沼澄人 (30) 喜代美の夫

青沼愛子 (3) 喜代美の長女

青沼貞子 (59) 喜代美の義母

安藤玲 (31)

五味房子 (59)

看護師
患者A
患者B

○ 里中大学病院・新生児室前

青沼喜代美(29) が青沼愛子(3) を抱っこして、ガラス越しに新生児室の赤ちゃんを指さしている。

喜代美 「ほら今あくびしたでしょ？あの赤ちゃんが愛子の弟だよ。愛ちゃん、とうとうお姉ちゃんだね」

愛子が振り向く。

愛子 「男の子なの？」

ビデオを撮っていた青沼澄人(30) がビデオから顔をずらし、

澄人 「びっくりだったよね。愛、弟でも可愛がってあげられるかな？」

愛子 「うん。弟がいい」

喜代美が愛子をみつめる。目を細めて愛子をギュッと抱きしめる。

廊下に響く靴音が少しずつ大きくなり、
青沼貞子(59) が現れる。

貞子 「トイレ行くのもひと苦勞だわ。病院で迷路みたい」

喜代美 「お義母さん、あと三日間愛子のこと
よろしくお願いします。」

貞子 「おじいちゃんのお通夜はあさってだっ
たわよね。愛ちゃん連れて、伺おうとは思
っているの」

喜代美 「無理なさらないでくださいね。母も
そう言っていました。後からお線香あげに来
て下さるだけで十分だつて」

貞子 「じゃ愛ちゃんの様子見てどうするか決
めさせてもらうわ。眠くなる時間なものね」
喜代美 「ええ、そうなんです。最近は抱っこ
も重いから」

ビデオを撮っていた澄人が振り向く。

澄人 「目開いたよ」

喜代美 「ほんとだ。きれい。茶色い瞳」

○ 同病院・308 号室（朝）

時計が六時五分前を指している。看護
士が顔をのぞかせて喜代美を見つける。
看護師 「青沼さん、授乳始まりますよ。これ

から三時間おきに言われなくても授乳室に来てくださいね」

喜代美 「はあい、すみません。わかりました」
窓際のベッドから起き上がる喜代美。
隣のベッドはカーテンで覆われてシーンとしている。仕切られたカーテンを見ながら部屋を出てゆく喜代美。

○ 里中病院・308 号室前廊下（夕）

喜代美がフェイスタオルとドーナツ型座布団を持って他の入院患者二人と話しながら廊下を歩いてくる。

患者A 「・・・うちの子ガッツいてるからさ、母乳だけでは全然足りない」

患者B 「青沼さんあんなに出ていいな」

喜代美 「これは家系みたいなのよ。家の母親もそうだったから」

患者A 「じゃまた3 時間後、授乳室でね。」

さあ寝よ寝よ。じゃなきや体がもたない」

喜代美 「うん、おやすみ」

喜代美が患者Aと患者Bに手を振りながら病室に入ってくる。隣のベッドのカーテンが、半分だけ開いている。喜代美が自分のベッドに静かに腰かける。窓を見ている喜代美の横顔。窓ガラスには、隣のベッドで横向きに丸まって寝ている白い小さな背中が映っている。

○ 同病院・談話室

喜代美と澄人がテーブル越しに向かい合って座っている。テーブルの上にはペットボトルのお茶と炭酸飲料が載っている。

澄人「それはあまりに無神経じゃないか」

喜代美「そうなの・産科のベッドが足りないからって、誰もかれもあの一部屋に詰め込まれている感じで。私のお隣の方はまだじゃべったことないけれど、子宮外妊娠された方らしいのよ。やっとできた赤ちゃんがだめだったらしいの」

澄人「病院に文句言っつてやろうか？」

喜代美「やめてやめて。意見を言うのなら、
退院するとき私が意見箱に書くから」

喜代美がペットボトルのお茶を飲みながら窓の外に視線を移す。

喜代美「夕方前なのに、うっすらと月が見えてる。きれいに真っ二つのお月様よね。あ
あいうの、下弦の月っていうのかしら」
窓の外には、紙のような半月がうっすらと浮かんでいる。

○ 同病院・外観

巨大な病院の建物。

庭園の花が小さな花をつけている。

真っ青な空に五分咲きの桜が色を添えている。

○ 同病院・308号室（朝）

喜代美がベッドで本を読んでいる。向かいのベッドの五味房子(59)がベッド

に座り、お茶を飲みながら窓の外を眺めていた。

房子「この分ならちようど入学式の頃に満開になるわね」

喜代美が本を枕元に置いて半身を起し、窓を眺める。

喜代美「雨が降らずにこのままもってくれたらいいですよ。それにしてもここからの景色はなかなかですね」

房子が喜代美の隣のベッドに寝ている安藤玲(31)の背中にむかって話かける。

房子「えっとお、安藤さんだったよね・・安藤さんもずっと寝てばかりいないでこっち来て景色を楽しんだら？桜の季節はすぐ終わっちゃうよ」

玲がのっそりと振り返り

玲「あ、はい・・ありがとうございます」

房子が湯呑を置き、軽快に玲のもとへ移動し、手を差し出す。

房子「ほら手につかまって。ずっと寝てばか

りだと筋肉萎えちやうよ」

喜代美も房子と玲のもとに行く。

よろける玲を二人で抱えながら、窓辺に移動する。窓に視線を映した玲の表情がぱつと明るくなる。

玲「きれい・・・」

玲の目にじんわりと涙が浮かぶ。

その表情を房子と喜代美が両側から見守っている。

○ 同病院・授乳室前（朝）

授乳室から数人の明るい喋り声が聞こえている。私服に着替えて赤ん坊を抱きかかえている喜代美が手を振りながら出てくる。

喜代美「じゃ、ラインするから・・・まずは一か月健診の時にね」

歩き出す喜代美の後ろを病院の寝巻を着た女性を通る。女性は、哺乳瓶を片手に未熟児治療室に入っていく。

しばらくの間、その扉を見つめている
喜代美。

○ 同病院・会計カウンター前（朝）

澄人がお財布をゴソゴソさせながら、
椅子に座っている喜代美のもとに歩いてくる。

澄人「これですべて完了。忘れ物ないかちゃんと調べた？」

喜代美「うん、大丈夫だと思う」

澄人「じゃ行く？」

喜代美「あのね、バタバタしてて房子さんと安藤さんにちゃんと挨拶してないんだ。ちよつと行ってくる。この子お願いできる？」

澄人「えっ？連れて行かないの？・あ・」

喜代美「うん・すぐ帰って来るから」

赤ん坊を澄人に託し、急ぎ足でその場を去る喜代美。

房子と玲が談笑している。そこへ喜代美が顔を出す。

房子「あー、喜代美ちゃん。何も言わずにさっさと退院しちゃったのかと思ったわよ、ね、玲ちゃん？」

玲が微笑む。

喜代美「そんなわけないじゃないですかあ。本当にお世話になりました。今日無事退院することになりました」

房子「よかったねえ・・おめでとう！」

房子と喜代美を代わる代わる見ていた玲が、モジモジしながら言う。

玲「喜代美さん、赤ちゃんは？赤ちゃんには会わせてくれないの？」

喜代美が一瞬目をパチクリした後、

喜代美「あ、今旦那に連れてきてもらおう所。遅いな、ちよつと見てくるね」

○ 同病院外観（朝）

病院内の桜並木が満開を迎え、日の光

を反射して輝いている。

○ 同病院 308 号室（朝）

赤ん坊を抱いている喜代美の両側で、
房子と玲が覗き込んでいる。

房子「可愛いなあ。お母さんとお父さんのい
い所をばっちり取ってるわ。こりや将来、
女泣かせの色男間違いなしだね」

玲が指で赤ん坊の頬をつつきながら、
玲「だっこさせてもらっていいですか？」

喜代美「もちろんよ」

喜代美が赤ん坊を玲に渡す。

玲が恐々赤ん坊を抱える。優しい表情
で赤ん坊を見つめている玲。それを見
つめていた喜代美が突然わっと泣き出
す。

喜代美「・・・ごめんなさい。なんで泣いてい
るのかわからないの・・・」

玲「そうですよ・・・なんで喜代美さんが泣く
んですか？」

房子「そうね・・・産後は情緒不安定になるっていうしね・・・」

房子もそう言いながら涙目に。

喜代美「ありがとね」

玲「こちらこそありがとう。私も早く元気になつて、喜代美さんみたいなお母さんになりますから」

房子「そうねそうね・・・そうよね」

○ 里中病院外庭（朝）

荷物を両手に抱えた澄人と、赤ん坊を抱いている喜代美が、満開の桜の下を歩いている。途中立ち止まり病院の3階を見上げる。窓には房子と玲が大きく手を振っている。

○ 同病院 308 号室・窓からの景色

喜代美と澄人が手を振っている。
辺りは満開の桜並木が輝いている。

完